

ユビキタスネット社会の実現に向けた政策懇談会基本政策WG(第1回)議事要旨

1 日 時

平成16年3月1日(月) 16時40分から18時00分

2 場 所

三田共用会議所C会議室

3 出席者(敬称略)

(1) 構成員

村上輝康(座長)、田邊忠夫、福井省三、前田裕、村上篤道、伊藤俊彦(山口光雄代理)、渡邊浩之

(2) 総務省

鈴木政策統括官、吉崎総合政策課長、黒瀬総合政策課調査官、高地総合政策課課長補佐

4 議 題

(1) 基本政策WG検討の方向性について

事務局より「資料2 基本政策WG検討の方向性」について説明があった。

(1)に対して、特段の意見なし。

(2) ITSの進め方から学べることについて

(株)野村総合研究所より「資料3 ITSの進め方から学べること」について説明があった。

(2)に対して、各構成員より以下の意見が出された。

- ユビキタスネットワークという点からすると、ITSで積み上げられた国家戦略としての骨太のアプローチや展開にはすごいという印象を非常に強くもっている。この問題意識がユビキタスネット社会の実現にあたっても応用できればと考えている。
- ITSは世界から見ると日本は多少進んでいるのは事実。但し、概念的に各分野が何をしなければならぬかについては共有しているが、具体策まで落とし込んだ場合にはまだ共有されておらず、省庁等関係者が多く、取り組みにはエネルギーが必要。
- ITSは全体的には進展しているが、いままでは夢を語る段階。いまからが現実で正念場。産官学が協力しようという雰囲気はできた。
- 総合的な取り組みが必要。車は1886年にドイツのカール・ベンツ等によって発明。しかし、車を普及させたのはアメリカで、インフラと燃料、そして、市場のパラダイムに合うように新しい技術をうまくもっていった。

- I T S はまだ資料で述べられているほど進んでない分野もある。I T S のシステムアーキテクチャを実現するには、ネットワークインフラが物理的にも論理的にも必要。誰がそのインフラを構築していくのか。そこがなかなか進まない。物理的なユビキタスネットワークと個が享受することをどう結びつけていくのが大事。
- I T S がやってきたところの後追いでなく、I T S がやってきたことからたくさんのことを学びながら、ユビキタスネット社会の実現を図っていくことが重要。

(3) u-Japan 政策パッケージの具体化方策について

事務局より「資料4 u-Japan 政策パッケージ」について説明があった。

(3) に対して、各構成員より以下の意見が出された。

- ユビキタスは「いつでも・どこでも・何でも」ということと「誰でも」ということが入ってくるとなるとかなり大きく変わってくる。「誰でも」という観点をどこまで盛り込むかが優先分野を決めるにあたっておおきな課題。
- ユビキタスネット社会の実現には、技術、サービス、実現のための課題という3つの要素がある。特に、実現するための課題には、様々な制度上の阻害要因や、やればできるが何かひっかかっていてできないもの等(例えば、e-Japan の生活分野等いくつかの省庁にまたがるもの等)があり、それをどうするかが問題。
- I T S の例は非常にいい。I T S は基本的には技術の話。ユビキタスネット社会は「いつでも、どこでも、何でも」といういろんなことができる社会の話なので、そのアーキテクチャについて、参考になる例に習うのはとてもいいことである。
- 「お年寄り＝誰でも」と認識。誰でも意識しないでつかえるということが必然的に入った上での3象限(いつでも・どこでも・何でも)。この必然になる過程については当然求めることが必要。ヒューマン・インターフェース等も出てきている。
- 総務省の他の研究会でも各パーツについては相当掘り下げられているが、それ以外の見えないところに対して本懇談会のI T 産業WGや利用環境WGがある。どこまでやれるかは別にして、出せるだけ洗い出し、やれることはやる。例えば、国会での対応、自主的なガイドライン、あるいは、総務省の所管の外のもの等がある。そのような問題があるという観点から世の中に提示することは総務省の立場としてできるのではないか。一つの出口として、次期 e-Japan 戦略があるかどうかはわからないが、そこに総務省として提言できることは当然やっていくべき。

- ソリューション提案型は大賛成。日本は、こういう捉え方で動かさないと国際的に負けてしまう。

2010年を考える前に、2030年か2050年かどうかはわからないが、各分野がどうなったらいいのか、その方向性がはっきりしていて、その過程として2010年がこうあるべきというアプローチでやることが重要。

資料4・P5の2番目、ここでの問題の捉え方としては、「そして、世界的な広がりをもてるもの」をつけ加えるほうが、広がりをもてるのではないか。例えば、高齢者のための優しい車ができれば世界につながる

優先分野について、横串の総合的テーマが必要。例えば、車で必要なコミュニケーションは医療・福祉・国民生活等様々なもので必要となるコミュニケーションとも関係しているはず。その場合にどのようなシステムが考えられるのかについて総合することが必要。

- インターネットとかはグローバルな世界である一方、ユビキタスは、本当の意味での生活、狭隘な世界を意味しているように思われる。生活重視が必要。そこをかんがえれば、ICTによるトレーサビリティのような生活安全というものが必要。
- 国民生活分野となると、すぐさま日本社会では高齢者とする。今の高齢者はあまり面倒を見ることはないのではないか。我々ももう10年もすれば高齢者になる。あまり高齢者、高齢者と強調しすぎるのはいかなものか。
- 資料4（補足）の9分野は全くの例示。まずはこの分野について議論し、加筆修正することが重要。
- 括り方は別途検討が必要であるが、食の安全というのは、医療等とおなじくらい重要。
- ソリューションというものの具体的な定義がないとなかなか先にすすまない。また、ある種の社会が共通に共有すべき基盤がどこまでで、個々の事業者が競争によって解決できるような部分とは何かという観点から、最適なラインをどこにとるかが重要。
- ユビキタスネット社会のソリューションにあたっては、ネットワークが重要。いろんな部分的な最適化モデルが現実存在する中で、もう一歩進めたユビキタスにする上で、全体として最適化する部分がある程度提示しないと、企業等は参加したくても参加できない。これをはやく提示することが必要。
- 優先9分野の前にステージ0というものがあり、ユビキタスネットワークのインフラそのものをどう構成していくかということを提示していくことが必要。そこをきちんとしないとその後のソリューションがぶれてしまう。
- 各優先分野はポイントを得ている。資料4・P12のような要求事項としてのユニバーサル

デザインや規制緩和、皆が使える認証をどうするかがインフラとしてある程度必要。2010年のユビキタスネット社会におけるインフラをまず規定すると議論しやすい。

- インフラのある程度のイメージは必要だが、ある生活をするにはどういうインフラが必要かという結果論であるべき。認証等についても、これらが使えない要因を問題点とし、これについては技術開発や制度等を含めて直す方向で検討すべき。現状から延長線上でものを見るというのでは2010年云々ということは出てこない。パラダイムシフトならば、あるべき姿から、それを阻害するものを抽出し、制度整備・技術開発等をするという提案をすることが必要。
- ユビキタスの概念自体が醸成できてない。ネットワークでは多くの回線があるが未使用が多い。おそらく今までの予測から外れ、ネットワークの使われ方が変化。ユーザが「いつでも・どこでも・何でも」というネットワークを使うのはほんの一部、ビジネスモデルも成り立たない。ネットワークの在り方は、ユーザがどういう場合に使いたいかな等を真剣に調査しないとだめ。「いつでも・どこでも・何でも」において、汎用的なブロードバンドネットワークありきではダメということがようやくわかってきたのではないかな。
- ユーザとの距離を限りなく縮めていくというのが、資料4のチャートを埋めていく作業になると思う。特に、優先課題分野については、早い時期にある程度の目処をつける必要がある。

以上